

教育研究業績書

2025年05月07日

所属：看護学科

資格：助教（臨床）

氏名：近藤 由佳子

研究分野 母性看護学，助産学，学校保健	研究内容のキーワード 健康教育，男性更年期障害，メンズヘルス
学位 修士（看護学）	最終学歴 武庫川女子大学大学院看護学研究科看護学研究コース 修士課程

教育上の能力に関する事項		
事項	年月日	概要
1 教育方法の実践例		
1.1) 配布資料を利用した復習の促進 2) グループワークを取り入れた授業展開 3) 確認課題を用いた理解度の確認	2022年9月～2024年7月	大和大学保健医療学部「助産診断技術学Ⅱ・Ⅲ」「母性臨床看護学」、大阪電気通信大学医療健康科学部「学校保健」で以下の1)～3)を実施した。
2. 助産診断技術学Ⅱ・Ⅲでの演習	2022年9月～2023年8月	大和大学保健医療学部「助産診断技術学Ⅱ・Ⅲ」では、助教として自身の臨床での経験を活かし、分娩介助技術などの演習を実施した。
3. 母性看護学演習での演習	2022年9月～2023年8月	大和大学保健医療学部「母性看護学演習」では、助教として自身の臨床経験を活かし、レオポルド触進法・胎児心音聴取・子宮底触診・授乳の観察などを実施した。
4. 臨地実習での実習指導 「母性看護学実習」「助産学実習（病院）」	2022年4月～2023年8月	大和大学保健医療学部「母性看護学実習」「助産学実習」では、助教として学生が看護（助産）計画を立案する際に、可能な範囲で臨床指導者に助言を得て、看護（助産）計画の方向性の確認を行い、学生が立案した看護計画と臨床現場での看護の方向性に大きなずれが生じないようにした。
5. 臨地実習での実習指導 「助産学実習（助産院での継続実習）」	2013年4月～2015年3月	千里金蘭大学看護学部の非常勤講師として、助産院への継続実習にて実習指導を行った。
2 作成した教科書、教材		
1.1) レディースヘルスセミナープログラム開発	2013年3月	正しい知識を習得し自分自身の身体に関心をもてること、助産師の特性や助産師に相談できる体制を周知することを目的として、女子大学生を対象に健康教育プログラムを開発し、実施した。「女性の身体の不思議」「いのちの新譜」「自分を大切にする」「助産師の役割」の4つのテーマで講義やグループワークを行った。
3 実務の経験を有する者についての特記事項		
1.1) 受胎調節実地指導員認定講習・講師	2023年3月	母体保護法15条の規定に基づいて都道府県知事の指定を受け、女性に対して受胎調節の指導を行える国家資格である受胎調節実施指導員の認定講習の講師を務めた。
4 その他		

職務上の実績に関する事項		
事項	年月日	概要
1 資格、免許		
1. 助産師免許	2002年4月	
2. 保健師免許	2001年4月	
3. 看護師免許	2001年4月	
4. 養護教諭一種免許状	1997年3月	
2 特許等		
3 実務の経験を有する者についての特記事項		
1. 内科診療所での臨床経験	2019年7月～2022年3月	総合診療を地域で展開する内科診療所にて、看護師・助産師として臨床を経験した。 漢方専門医の院長の元で、漢方や栄養療法について学び、オーソモレキュラー栄養療法の認定資格を取得した。

職務上の実績に関する事項		
事項	年月日	概要
3 実務の経験を有する者についての特記事項		
2. 産科クリニックでの臨床経験②	2018年3月2019年6月	産科クリニックにて、助産師として産科外来・分娩介助・病棟・助産師外来での臨床を経験した。
3. 「レディースヘルスセミナー」の実施	2013年4月～2017年3月	大阪府助産師会とのコラボレーション事業として、「レディースヘルスセミナー」と題した大学生向け健康教育プログラムを開発し、看護学科と栄養学科1年生を対象に開催した。
4. 助産院での臨床経験	2010年12月2011年12月	助産師として、助産院での妊婦健診・分娩（自宅出産含む）などの臨床を経験した。
5. 産科クリニックでの臨床経験①	2007年7月～2009年12月	分娩件数の多い産科クリニックにて、助産師として産科外来・分娩介助・病棟・助産師外来での臨床を経験した。
6. 総合病院 産科病棟・NICUでの臨床経験	2001年4月～2007年6月	市立豊中病院の常勤看護師・助産師として産科病棟、NICUでの臨床を経験した。
4 その他		

研究業績等に関する事項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
1 著書				
2 学位論文				
1. 1. 男性更年期障害の中年期男性の症状の自覚から改善に至るまでの体験	単	2025年3月	武庫川女子大学大学院看護学研究科看護学研究コース修士課程、修士論文	男性更年期障害を発症した年齢が40歳代・50歳代の男性で症状が改善した方を対象に、症状の自覚から改善に至るまでの体験と対処行動について明らかにする目的で質的調査を行った。その結果、症状の自覚から受診に至るまで約10年という長い時間を要しており、診療科の選択の難しさ、羞恥心、家族の反対など、男性外来受診にはハードルがあるこなどが明らかとなった。また、受診後は診断がつくことで安堵しテストステロン補充療法の開始・継続を受け入れながら、症状改善のためにセルフケアを上手にとりいれ継続していたことが明らかとなった。よって、不調を抱え続けなかったための支援としては、男性更年期障害の認知度の向上やストレス軽減支援、意思決定支援が重要なことが示唆された。
3 学術論文				
1. 助産師による大学生向け健康教育に関する考察	単	2021年8月	大学教育, 6, pp. 71-75	大学教育における母子保健の理解の深化を目的とし、「からだの仕組み」「セルフケア」「助産師の役割」といった教育プログラムの継続的実践の必要性について言及した。 著者：近藤由佳子
2. 助産師による女子大学生への健康教育「レディースヘルスセミナー」のプログラム開発	共	2014年6月	大阪母性衛生学会雑誌, 50(1), pp. 7-12	女子大学生を対象に助産師の役割を周知し、セルフケアするための講義型及び参加型教育プログラムを開発して実施した。その結果、受講者数の増加やファシリテーターの力といった教育効果を向上させるための課題を明らかにした。 本人担当部分：セミナー企画・プログラム開発・セミナー講演・評価のためのアンケートの作成 著者：立岡(近藤)由佳子、徳山可奈、野原留美、浅見恵梨子、大平純子
3. 助産師による女子大学生向け健康教育「レディースヘルスセミナー」プログラムの評価	共	2014年6月	大阪母性衛生学会雑誌, 50(1), pp. 13-20	女子大学生に対して「レディースヘルスセミナー」を実施し、性に関するセルフケアについての知識とセミナー実施についての評価を行った結果、知識はあるが行動に結びついておらず、女子大生への性教育が重要であり、継続的にセミナーを開催する意義があることが示唆された。 本人担当部分：セミナー企画・プログラム開発・セミナー講演・評価のためのアンケート作成、論文の執筆 著者：野原留美、浅見恵梨子、徳山可奈、立岡(近藤)由佳子など（計14名）
4. 性と生命を大切にす力るを育む健康教育の実践：助産師による女子大学生へのレディースヘルスセ	単	2013年3月	日本教育公務員弘済会大阪支部平成25年度教育研究集録, 20, pp. 44-47	4. 大学生を対象に企画・実施したセルフケアができるような健康教育プログラムにおいて、グループワークを取り入れたことで、高い学習効果が得られ、月経や出産に対する肯定的感情や暴力についての理解が深まったことを報告した。 本人担当部分：セミナー企画・プログラム開発・セミナー講演・評

研究業績等に関する事項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
3 学術論文				
ナー報告				価のためのアンケート作成、論文の執筆 著者：立岡(近藤)由佳子
その他				
1. 学会ゲストスピーカー				
2. 学会発表				
1. A女子大学生における健康教育「レディースヘルスセミナー」の意義	共	2013年12月	第52回大阪母性衛生学会学術集会（大阪大学中之島センター）	セミナー後、受講者の自身の身体への関心や身体を大事にしようとする思い、月経のイメージへの意識が変化した。助産師が女子大学生の健康増進に果たす役割が大きいことが示唆された。 著者：野原留美，徳山可奈，立岡（近藤）由佳子，浅見恵梨子，大平純子
2. 助産師による女子大学生への健康教育「レディースヘルスセミナー」の実践報告	共	2013年12月	第52回大阪母性衛生学会学術集会（大阪大学中之島センター）	学術論文3.3)の内容を発表した 著者：立岡(近藤)由佳子，徳山可奈，浅見恵梨子，野原留美，秋田浩子，徐知恵ら（計12名）
3. 総説				
4. 芸術（建築模型等含む）・スポーツ分野の業績				
5. 報告発表・翻訳・編集・座談会・討論・発表等				
6. 研究費の取得状況				
学会及び社会における活動等				
年月日		事項		
1. 2024年4月～現在		日本抗加齢医学会		